

三鈷沢抖擻の補足・補完資料

- 【 補完資料－H 1 】 天気図
- 【 補完資料－H 2 】 真の三鈷沢（元三鈷沢）の場所とは
- 【 補完資料－H 3 】 三鈷沢予備探査
- 【 補完資料－H 4 】 御滝神社（中台）往復
- 【 補完資料－H 5 】 「三鈷大悲遍照如来」
- 【 補完資料－H 6 】 今回の留意点
- 【 おわりに 】

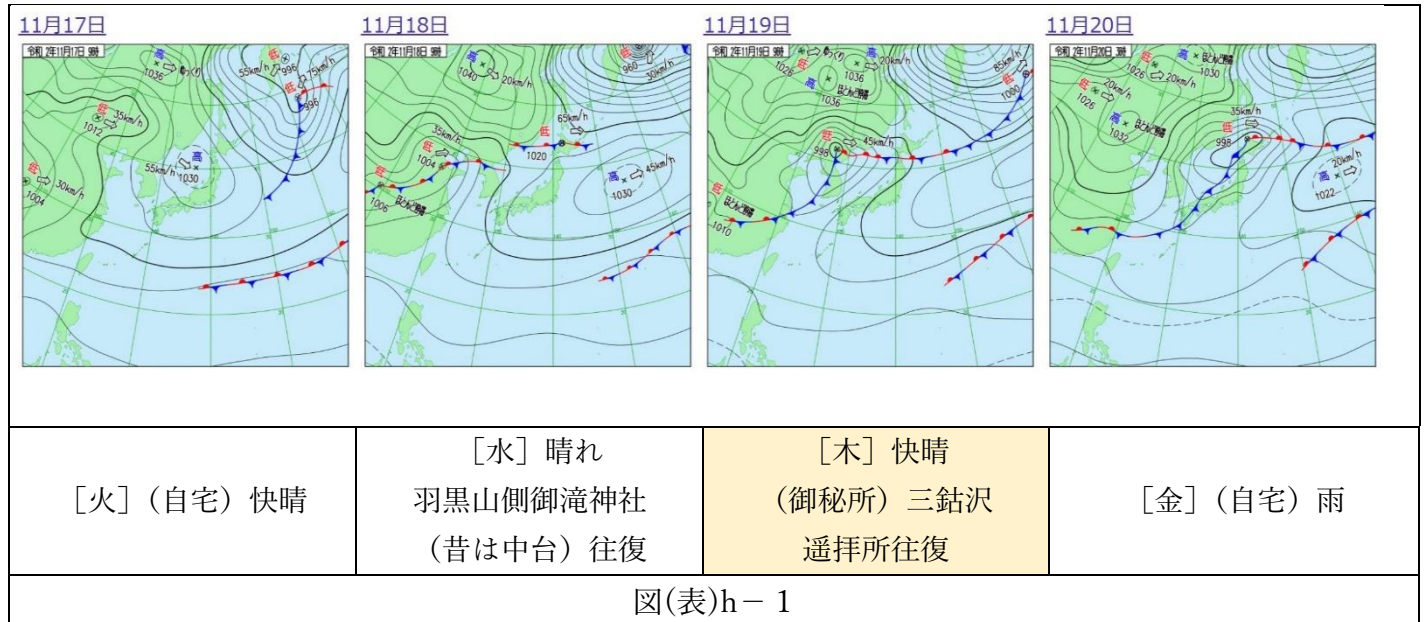
.....

- 【 補完資料－その他 】 《歴史&宗教 No014》宗教界に重用される椿

【 補完資料－H 1 】 天気図

図(表)h－1は帰宅後、気象庁の過去データより抽出したものである。

16日・17日の予報では、――高気圧は西に移動しつつあるが、そのへりを回るように南風が強まり、17日(火)から次第に気温が上がり19日(木)はピークを迎えるだろうとのことであった。他方で、高気圧が移動するという事は、寒冷前線が日本に接近することから天気は徐々に下り坂ということであった。



そこで、18日(水)に三鈷沢に行く選択枝もあったが、前記「日にちの数字と縁起担ぎの語呂合わせ」のこともあって、今流行りの言葉で言えば、総合的・俯瞰的な観点を踏まえて、(御秘所)三鈷沢遥拝所往復は19日(木)に決定したのである。

本当は、私の心の中に住む合祭神(syncretism God)とお天道様の指令に基づく決行であった。

加えて、車に戻った14時10分頃も快晴であった。

19日(木)は図(表)h－2のとおり、山形で最高気温21.5度を記録したが、これは同月観測史上最高値ということである。

自宅に戻った翌日20日(金)は、山形県内は1日中雨であった。

アメダス(表形式)

印刷 再読み込み

観測項目の説明 府県選択画面へ 地点選択画面へ アメダス(地図形式)へ

説明へ

2020年11月19日 山形(ヤマガタ)

北緯: 38 度 15.3 分 東経: 140 度 20.7 分 標高: 153 m 今日の観測データ 最低・最高気温

時刻 時	気温 ℃	降水量 mm	風向 16方位	風速 m/s	日照時間 h	積雪深 cm	湿度 %	気圧 hPa
1	7.7	0.0	南南西	1.2		0	91	1022.4
2	7.2	0.0	北東	0.4		0	94	1022.2
3	6.8	0.0	東北東	0.7		0	94	1022.3
4	6.3	0.0	南南東	0.6	0.0	0	95	1021.7
5	6.4	0.0	北	0.7	0.0	0	94	1021.7
6	6.4	0.0	北北東	1.1	0.0	0	94	1021.8
7	6.6	0.0	北	1.1	0.0	0	94	1021.9
8	7.8	0.0	南南西	0.8	0.0	0	92	1021.7
9	9.9	0.0	南	1.2	1.0	0	82	1020.9
10	12.7	0.0	西北西	1.0	1.0	0	73	1019.5
11	15.5	0.0	北北西	1.1	1.0	0	65	1017.8
12	18.1	0.0	南西	0.6	1.0	0	54	1016.1
13	20.2	0.0	北西	0.7	1.0	0	51	1014.7
14	20.8	0.0	北北東	0.9	1.0	0	51	1013.7
15	21.1	0.0	北西	0.4	0.8	0	51	1013.4
16	19.3	0.0	西南西	0.6	0.7	0	58	1013.3
17	16.9	0.0	南東	1.0	0.0	0	70	1012.6
18	14.7	0.0	南東	1.5	0.0	0	76	1012.1
19	13.8	0.0	西南西	0.7	0.0	0	82	1012.1
20	13.4	0.0	南南西	1.4	0.0	0	79	1011.5
21	13.1	0.0	北北西	0.5		0	81	1011.8
22	12.7	0.0	西北西	0.9		0	87	1011.7
23	14.1	0.0	南南西	2.1		0	77	1010.5
24	12.3	0.0	東北東	0.9		0	89	1009.9

	データ	時刻
最低気温(℃)	5.9	03:48
最高気温(℃)	21.5	15:07
最大瞬間風速(m/s) (風向(16方位))	4.8(南南東)	22:50

図(表)h－2

【 補完資料－H 2 】 真の三鈷沢（元三鈷沢）の場所とは

1. (前者) 片山正和氏著「出羽三山 山伏の世界（新人物往来社）」より。

その中に次のようなくだりがある。

「P107～P108；・・・先達は仏像を石の上に置くと、周りに灯明を立てた。ここで遥拝するのだという。というのは、三鈷沢へ行く道は途絶えてしまっているのだ。このため、三鈷沢の拝所のあった方角を向いて遥拝するのだ。前方を見ると、山肌の崩れた崖が見える。あの付近が三鈷沢なのだろうか。それにしても最大の拝所と期待して登って来ただけに残念である。これでは身に着けるはずの靈氣も半減するのではないか、ちょっと心配である。・・・大先達の実父で今回の『秋の峰入り』では知事役を務めた島津愿道さん(76)に話を聞いた。三鈷沢に行くことが出来たのは、大正の頃までであった。崩壊しない前の三鈷沢には、崖の途中に洞窟があった。ここで昔、のぞきの行があったという。・・・一足遅れて神社の『秋の峰入り』に参加している山伏たちが登って来た。その山伏たちが、私たちが遥拝した場所の裏側の山崩れ跡から多数の刀を発見したのである。その数は五十本近くにものぼった。いずれも鞘はなく、抜身のままで、ボロボロに錆びていた。この刀は現在、出羽三山歴史博物館に保管されている。同博物館で調べて貰ったところ、すべて無名であったが、鎌倉・室町時代のものと思える古刀もあった。一体、この刀は、なぜ、こんな場所に埋まっていたのか。戸川安章さんに話を聞いたところ、『それは縄切り刀ではないか。この世とあの世のきずなを切るため、三鈷沢に持って行ったのではないか。』という。とすると、謎が出てくるのだ。私たちは今、大悲遍照如来像を安置して、はるか彼方を遥拝した。崖崩れ跡を遥拝したのは、そこがかつての三鈷沢の秘所だったからである。しかし、実際は違うのではないか、という疑問が出て来る。その疑問を生じさせたのは出土したこれらの刀である。遥拝場所の裏側から多量の刀が見つかったことは、つまり、そこに洞窟があったことを意味するのではないか、ということである。もし、そうだとすると、まさに秘所なのである。蜂子皇子の洞窟を隠すため、私たちは全く反対の方向を拝まされていた。もちろん、洞窟のある場所は、限られた先達ら数人しか知らないのである。山伏の教えには、秘密のベールに覆われたものが多い。重要なことは、いずれも口伝で、文字に表されない。事実を裏表にすることは容易であろう。これらの錆び付いた刀は、博物館の収蔵庫に眠っているが、本当の謎解きはこれからである。・・・」

2. (後者) 伊藤武著「出羽三山（みちのく書房）」より。

その中に次のように書かれてる。

「P53；・・・虚空蔵岳・火打岳を源流とする赤沢上流に、羽黒修験の最大の秘所と言われる大岩壁の『三鈷沢』が荒々しく岩肌を見せている。この拝所・三鈷沢は金胎両部の大日如来（密教）と上品上性の阿弥陀如来（浄土教思想）とが一体となった仏『三鈷沢大悲遍照如来』あるいは『三吉沢大神』を本尊とし、秋峰の山中とそう抖擻行には欠くことの出来ない所である。この大岩壁は大正 12(1921)年に大崩壊したが、その折沢山の刀剣が発見されたという。戸川安章氏によると、この刀剣は室町時代にあった虚空蔵山の戦いによる戦死者のものではないかと言う。・・・」

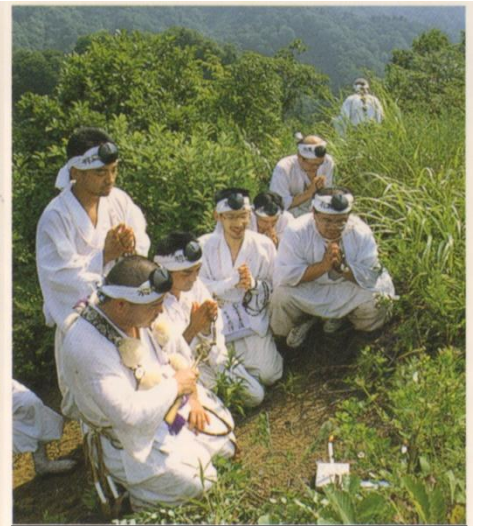
図 h-3 は、伊藤氏著本の P245・P246 に記載の写真（コメント付き）を拝借したもの。同本の内容を踏まえると、御秘所の元三鈷沢とは、この大岩壁のどこか――次頁図 h-4 の③域――あった、そこが崩落したということが理解出来る。



三鈷大悲遍照如来の座す大岩壁



三鈷沢岩壁直下を行く行者



岩壁山頂直下に三鈷大悲遍照如来
を安置して拝礼
(現在の遥拝所の場所であろう。)

図 h-3

3. 私の見立ての検討

さて、私はその中で、真の三鈷沢の秘所とはどこなのかということが最大の関心事である。二つの書物を読み比べて、真の三鈷沢とは、図 h-4 の中で紫色の実線で囲んだ3か所が考えられる。

□1；前頁前者からは、①あるいは②の場所ではないだろうか。(遥拝所から②を見た処、樹木の影響などもあったが激しく崩れた崖としては明瞭に視認出来なかった。)

□2；前頁後者からは、③の場所ではないだろうか。

すると、両者の見解は異なるということになる。私の勘違い、読み違い、それともまったく別の所なのか。ただ、いずれにしても、三鈷沢とは一つの場所だったのか、あるいは、この地域(図 h-4)全体を指したのか？——例えば、『蔵王山』というが、単独峰があるわけではなく、あの一帯の山塊を言うことと同じ発想である。

4. 最大の疑問

前記後者に記載の「最大の秘所と言われる大岩壁の『三鈷沢』が、・・・この大岩壁は大正12(1921)年に大崩壊した」との係りである。もしも、この大岩壁(図 h-4 の③域)が元の真三鈷沢秘所である——(図 h-4 の①・②でもよいが)——ならば、崩れたなりに遥拝所(拝所)は河原で良かったはず。なのに、なぜ急坂を登った現在位置に設定したのか？



図 h-4

目標とする現地に行くこと適わず少し離れた所から拝む場合を「遥拝」というが、遥は「はるかに」の意味合いですから、対象に対して図 h-5 のとおりの3方向が考えられる。感覚的には下方向に望む場合と思いたくなるが、水平方向にしても、上目使い方向にしても、遥拝と言うことだろう。

私の想像は次のとおり。

あらためて神仏習合時代の出羽三山の本地垂迹説による神と仏・菩薩の関係について、「羽黒山の神仏分離（いでは文化記念館）」を参考に整理すると図(表)h-6 のとおり。

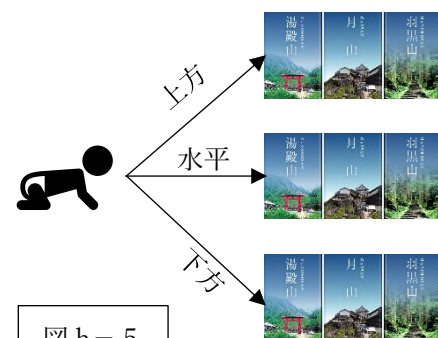


図 h-5

山名	社名	祭神（垂迹）	本地仏	三世
羽黒山	いでは 出羽神社	いではのかみ うかのみたまのみこと 伊氏波神、倉稲魂命 ・羽黒権現	聖観世音菩薩	げんせりやく 現世利益を適える 現在の山
月 山	がつさん 月山神社	つきよのみこと 月読命 ・月山権現	阿弥陀如来	祖霊が鎮まる過去 の山
湯殿山	湯殿山神社	おおやまづみのかみ おおなむちのみこと すくなひこなのみこと 大山神（大己貴命・少彦名命） ・湯殿権現	大日如来	生命の誕生を表す 未来の山

図(表)h-6

現在、出羽三山神社の本殿というべき三神合祭殿には、図 h-7 のとおりの扁額が設置されている。また、崩落した大正 12 年頃は既に神仏分離は定着しつつあっただろう、そのようなことから三山中月山神社を筆頭格においていた（中央配置していた）訳だから。そこで、元三鈷沢の崩落を機会にこれら三山の神を一緒に遥拝出来る場所探しの検討を行ったのだらうと推察する。何よりも月山山頂をはっきり視認しながら遥拝出来る場所を求めたのであろう、その結果一三神合祭神のお告げがあって現在の位置になったものと推測している。



図 h-7

図 h-8 のとおり、現遥拝所に立つと、月山神社と同山頂右方向奥には湯殿山神社が、水平方向に大岩壁頂部（図 h-9）、その方向奥には羽黒山^{いでは}は出羽神社が鎮座している状況を地理的に一体となって確認出来る。さらに、東補陀落秘所①、西補陀落秘所②も入る。



図 h-8

現遥拝所からの大岩壁頂部



図 h-9

もしも、『大岩壁全貌が元三鈷沢』、あるいは『大岩壁内部に元三鈷沢があった』ならば、現遥拝所からはこれらの全ての秘所を肉眼で対話しながら一緒・同時に遥拝出来る場所なのである。

最大・最奥の秘所と言われるからには、靈氣漂う洞窟あるいは磐座^{いわくら}などがあり神秘的な所ではないかと期待感があったが、そんな根暗な所では無く、明るい開放的な素晴らしいロケーションの秘所であった。

結局は、私が見た処では前記図 h-4 の③部に、突き出た頂部を頭とした大岩壁の大迫力と両手を広げた左右対称性の大形状からして、その全体を称して私が名付けた「能除仙岩塊大明神」^{のうじょせんがんかい}の懷に抱かれるように、真の修行地三鈷沢洞窟があったのだらうと確信した。

余談であるが、出土した刀剣の意味合いについて、前者片山氏は「(109 頁) 縄切り刀」と言う、後者伊藤氏は「(53 頁) 戦死者のもの」と言う、同じ戸川安章氏からの聞き取りと言いながらまったく異なるものに解釈されている。戸川氏の使い分けなのか、それとも、片山・伊藤両氏の聴き・記憶違いなのか。まさに、伝言ゲームに学ぶ「人伝の情報伝達方法の危うさ」^{ひとつて}そのものではないか？ と思った。また、前記、元三鈷沢の位置にしても、反対になっている、これもその（伝言ゲーム）延長線上の「もの・こと」なのか？

そこで、戸川安章氏を直接確かめた、同氏著書「出羽修験の修行と生活（佼成出版社）」には、その刀出土の意味合いについて a・b の両方を記載（115 頁） している！

【 補完資料－H 3 】 三鈷沢予備探査

三鈷沢行きについては、予備調査のつもりで行ける所まで行って見ようと、2020(R2)年10月27日(火)に挑戦していた。この時は知人と二人で行ったのだが、懸念していたとおり途中(立谷沢川砂防ダム)で相手が体調不良を起こし目標地まで行くことが適わず、私だけがアーチ式砂防ダムの手前で折り返していた。その時の記録の概要である。

図 h-10 は全体図である。



全体状況図は図 h-11a で、図 h-11b に拡大図を示す。

図 h-11a 中の砂防ダムは、図 h-11b 地形図の緑色点線で囲んだ砂防ダムである。

図 h-11ab 中紫色の実線は、前回 2020(R2)年 10 月 27 日（火）に行った時のルート、GPS 軌跡である。

図 h-11ab 中赤色の実線は、今回 2020(R2)年 11 月 19 日(木)に行った時のルート、GPS 軌跡である。

図 h-11a は、前回と今回の GPS トラックログ（軌跡）の合成鳥観図である。

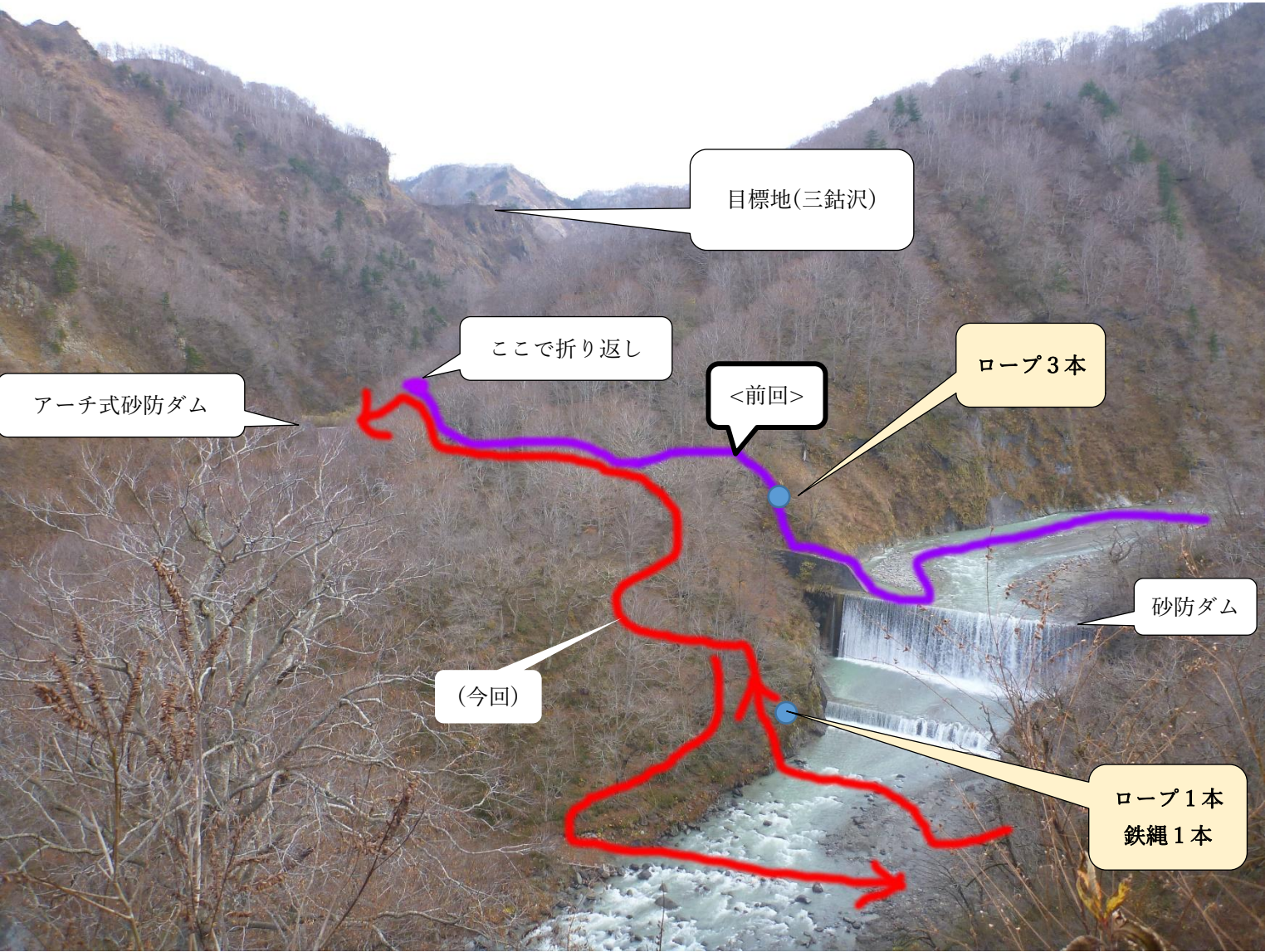


図 h-11a

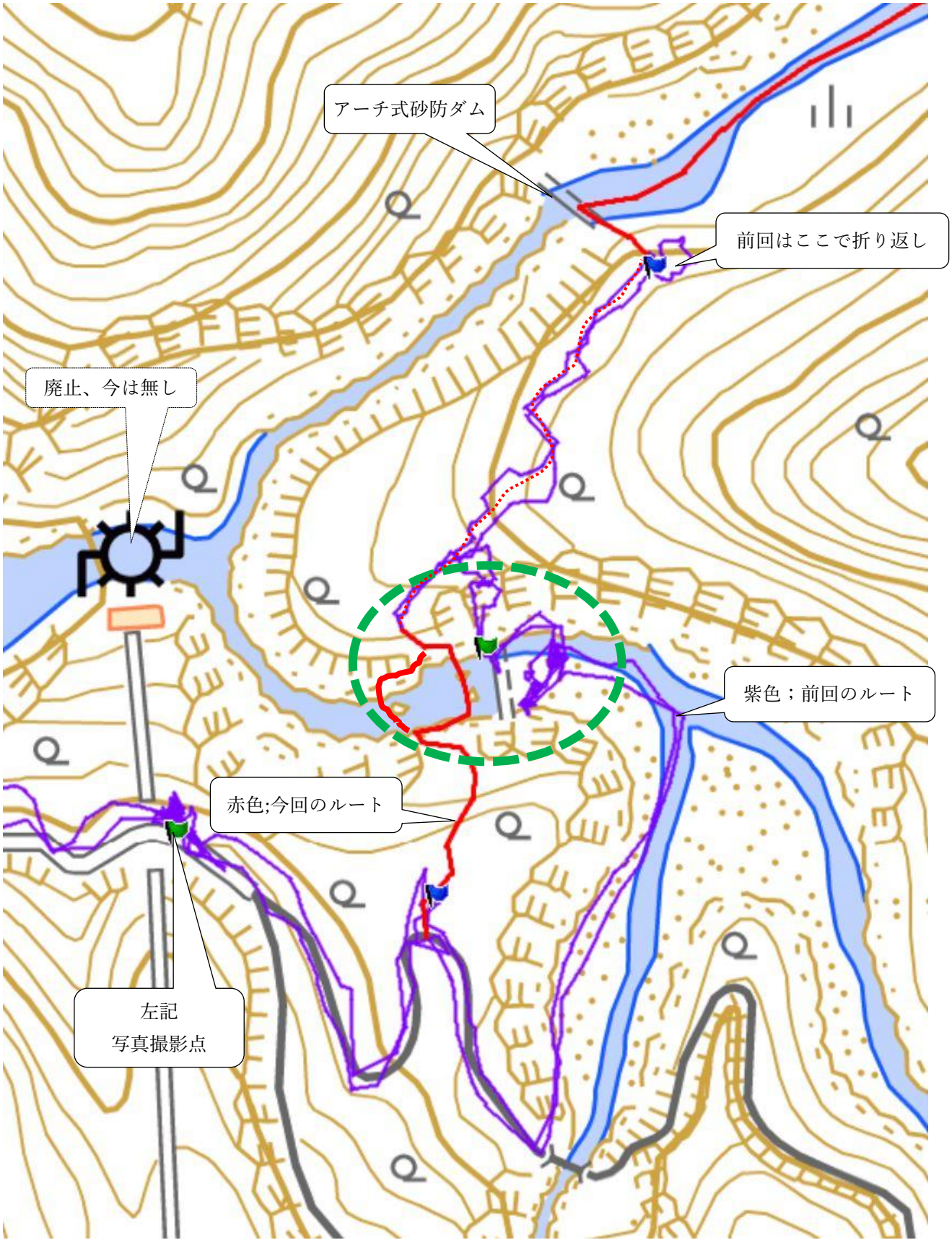


図 h-11b

【 補完資料－H 5 】 御滝神社（中台^{ちゅうだい}）往復

図 h－12a 地図上の林道分岐点に写真のような「修験道 御滝神社口」という案内道標(図 h－12b)を以前確認していたことから、2020(R2)年 11 月 18 日(水)、三鈷沢行きの前日、往復して来た。



図 h－12b

ここは、前出本「出羽三山 山伏の世界」によると、神道派および仏教派の「秋峰」修行の地である。現在は御滝神社というが、元々は「中台」と云われた昔からの修行地である。神仏分離以前は不動明王（不動尊）が祀られていたとのこと。片道 1.3km で約 1 時間掛かった、道幅は 2 m ほどもあり、よく整備された道（図 h-13）であった。

同神社（図 h-14）は、「出羽三山史（出羽三山神社監修）」によると、古来立谷沢川溪谷においては砂金採取が盛んに行われ、この神社の古い祭神は「金山彦神」と称され、採鉱者たちの篤い信仰が集まったとのこと。

同社は立谷沢川沿いにあり、図 h-15 は立谷沢川側（対岸には集落がある。）から見た正面階段・参拝口である。図 h-16 は境内にある石碑である。また、近くには小さな三段ほどの滝（図 h-17）があった、ここが滝行の場所であろうか？ただ落差が小さ過ぎるという感じをしたが、ただ、V 字状の割れ目といい何か妖艶さをも感じた。

羽黒町の正善寺島津代表によれば、秋の峰入り修行一の宿で行う「七峰八沢」の中心がこの中台であり、合わせてマンダラの世界を感得する必要があるとのことである。

図 h-13

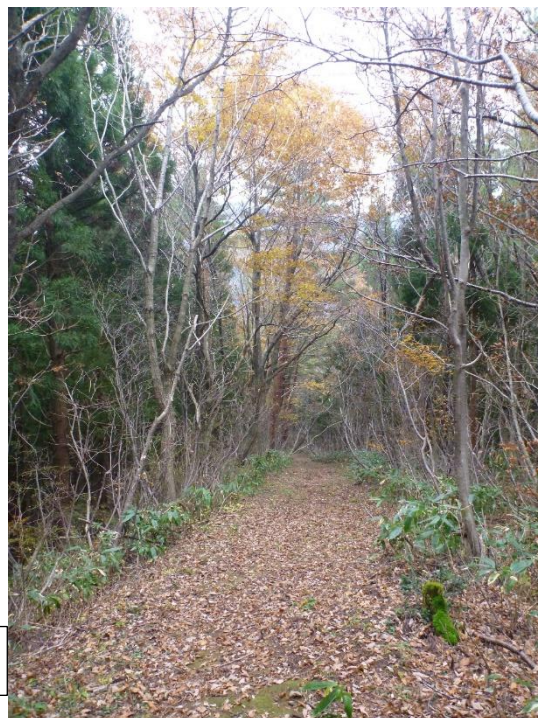


図 h-14



図 h-15



図 h-16

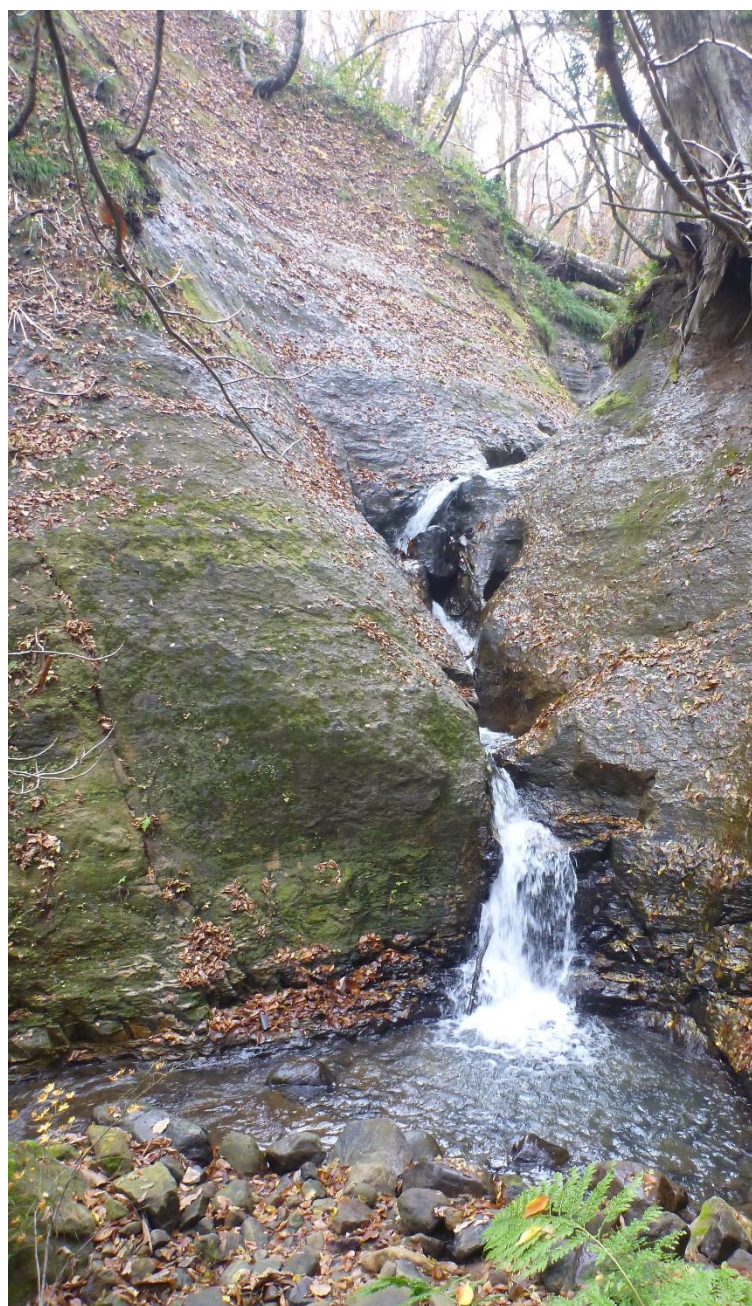


図 h-17

【 補完資料－H 6 】 「三鈷大悲遍照如来」

三鈷沢は、^{じょうぼん・じょうしょう}上品上生――仏の世界における最高ランク――の阿弥陀如来と金胎兩部の大日如来が合体した「三鈷大悲遍照如来」の浄土とされている。

「三鈷大悲遍照如来」(図 h-18/正善院よりご厚意)は、その姿は、月山の阿弥陀如来(過去)と湯殿山の大日如来(未来)が合体し、羽黒山の聖観音(現在)の姿で示現した様相となっている。いわば出羽三山の三霊がここに凝縮・同梱した場所である。それにしても、とてもやさしい象容である。

正善院荒澤寺の秋の峰入りに当たっては、この像を包んで遥拝所まで背負い参拝することである。昔(本来)は、笈に入れて背負ったそうである。

【補完資料－H 2】中の図 h-3 中の左写真右下の像がこれである。

同像はまた金剛界の大日如来で、金胎兩部のそれぞれの印相は図 h-19 のとおり。



図 h-18

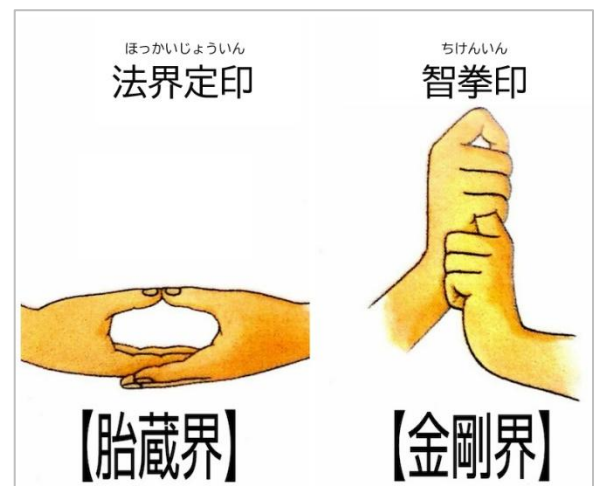


図 h-19

1. 靴

駐車地点からの林道は、立谷沢川へ降りる分岐点まで登山靴を履き1時間ほどかけて歩いた。立谷沢川の河原に着いた所で地下足袋に（靴下と共に）履き替えた。登山靴は傍の樹木枝に吊り下げた。

前回の予備調査時は、モンベル製ゴム底靴（図 h-20a）を使用した。川底石の把持力がしっくりこなかったことから、今回は MARUGO(マルゴ)製スパイク付地下足袋（図 h-20b）を使用した。後者の方が把持力に手ごたえがあった。それでも完璧では無く、川底のぬめりには勝てない思いがした。



図 h-20a

図 h-20b

2. 鳥獣（熊）対策

特に熊対策が念頭にあって、次のようなものを身に着けた。

（1）腰左右には図 h-21a のとおりの長形ナイフ(34cm) と鉈(29cm)をぶら下げた。

（2）また、図 h-21b のとおり、歩行用ダブルストックの片方に鈴（音色が遠くまで響くもの）を下げ、ザックの肩バンドの左右には、呼子と小ラッパ（13cm）を取付け、時々吹き鳴らしながら歩いた。

熊が冬眠に入る時期なのかどうか、反って眠りを起こしてしまうのではないかと心配もあったが。

なぜ、こんなにも用心したのかということだが訳がある。【補完資料－H 3】に記述したとおり、予備調査に出かけた時に、次のような熊情報に出会ったからである。

帰りのことだが、図 h-22a の R 1 地点で、河川管理なのか、林道管理に係るものなのか、役所のパトロール車の運転手から、“そのの敷中に熊がいるから注意を”と声を掛けられた。

また、図 h-22b のとおり、歩を進め R 2 地点に差し掛かった時、周辺がギャギャと騒々しいのでよく見渡したら小熊が木から降りる所———地上で母熊が応答している模様———を発見した。林道から直線距離 40m・50m 前後？ 今回、『あの木』というものを再確認して来た。

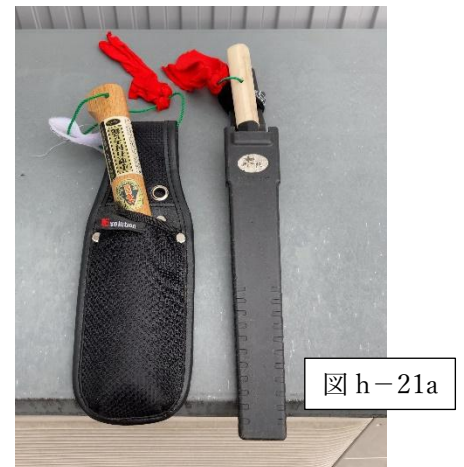


図 h-21a



図 h-21b



【 補完資料－その他 】 《歴史&宗教 No014》 宗教界に重用される椿

【 三 鈺 沢 抖 擻 総 合 所 感 】

10 年越しの長年・積年の思いを適うことが出来ました。

1968 (昭和 43 年) 高卒後に社会人となった時、鶴岡市内の会社職場に配属されたことから出羽三山および同神社について関心を持ち、山登りや拝観を何度となく行って来ました。

2009(H21)年の 60 歳定年の時に、歴史全般とともに特に羽黒修験道の聖地に対する関心が強まりました。冒頭の図－1 に記述したとおり、私なりに出羽三山七大御秘所を設定して現地探査を行って来ました。中でも三鈺沢の聖地がとても気になっていました。開祖蜂子皇子^{はちこのおうじ} (※1) が出羽三山開山に当り最初の修行地であった阿久谷^{あこや}には 2016(H28)年 10 月 12 日(水)に行き参拝して来ました。そして、同皇子の (※2) 開山直前最後の修行地とされる三鈺沢行きは自らに課した宿題でありました。

(※1) (※2) 同皇子が羽黒に入り一山の開発・開拓事業に取り掛かる前に修行に入り、最初の所が阿久谷、さらに修行を続け、修行成就・悟りを開いた所が三鈺沢です、その末に出羽大神となり、いよいよ羽黒山の開山事業に本格的に取り組み、次いで月山、次に湯殿山を開かれたのです。そして、晩年、阿久谷の修行を最終として皇野^{すべの} (元羽黒) に住み、最後は 125 歳で昇天したということです。

三鈺沢 (遥拝所) を目指す山伏修行は「神道派、出羽三山神社主催の秋の峰入り、毎年 8 月 25 日～9 月 1 日の 7 日間」と、「仏教派、荒澤寺正善院主催の秋峰 8 月 24 日～9 月 1 日の 8 日間」の二つありますが、素人として探してみたいと思って来ました。しかし、禁足の地、最奥の秘所とされる「三鈺沢」の場所を特定出来ずに思案していました。

書籍に触れるなどの情報によると難所中の難所と云われています。

前記した片山正和氏著「出羽三山 山伏の世界 (新人物往来社)」の中から抽出します。

「―――・・・三鈺沢への道は遠く、何度も川や谷を越えながら、急峻な崖をよじ登るのだという。このため、多くの危険を伴うので天気の良い日でないと抖擻行は中止になる。峰中^{とそう}に五、六回も入っているのに、まだ、一度も三鈺沢^{とはい}に登拝したことの無い人がいるのもそのせいである。・・・―――」

そもそもの三鈺沢の宗教的意味は何なのか? 「修験道の精神生活 (内藤正敏著)」より引用します。

「・・・三鈺沢は上品上生^{じょうぼんじょうしょう} (最上級) の阿弥陀如来と金胎両部の大日如来が合体した『三鈺沢大悲遍照如来』の浄土とされ、その姿は聖観音に似ている。いわば、『三鈺沢大悲遍照如来』は羽黒山の観音と月山の阿弥陀と湯殿山の大日が一緒になった仏であり、三鈺沢は出羽三山の神霊がすべてここに凝縮した場所といってよい。・・・」

2010(H22)年 61 歳から 2019(R 元)年 70 歳までの 10 年間に連泊累積日数 452 日泊、実歩行累積距離数 19,955km の「歴史街道・歴史古道&へんろ スルーハイク(歩き旅)遊学紀行」に臨んで来ました、様々な不安を駆られるルート・ファイティングに挑んで来ましたが、この三鈺沢行きはそんなに奥まった場所では無いものの、不安・恐怖らしきものが過って決断しかねていました。

なぜなのか、前記の情報もあるが、実は出羽三山関係者から「最奥のご秘所につき、素人は行ってはならないのだ、立ち入り厳禁の場所なのだ! 」と言われていたことも躊躇の一因でありました。

しかし、娑婆の人間故に「禁足地だ、行くな、見るな! 」と言われると、神社境内では無く国有地であろうから、行きたくなるのが人情です。

また、日頃、神仏は迷信・偶像崇拜だと揶揄している身にとって、生半可な知識を持ったものだから、禁忌地侵入には天罰が下るといような妄想にかられる思いにもなって、あれこれ逡巡しているうちに10年が過ぎ、「三鈷沢」に行くことがここ10年の最大の悲願でありました。しかし、前記したようにこの時がチャンスというヒラメキがあって決行したのです。

三鈷沢そのものはどの場所をいうのか？ 秘所というくらいだから何か巨木があるのか、巨岩があるのか、洞窟があるのか、何か、東補陀落や西補陀落にあるような、驚愕するような自然物があるのだろうか、と一面期待しながら、行って来ました。場所そのものは——地点という意味では、そういう面ではそのような自然物は無く期待外れと言えなくもありませんでした。

ルートは、これまでの私の山登り経験からして、格別の危険を感じる、急坂を感じるという所ではありませんでした。ただし、樹木が繁茂している時期、水量が多い時期は難儀を要するエリア、素人が容易に入り込めるエリアではないということは確かでありました。

前記、二つの「秋の峰入り」「秋の峰」山伏修行の8月末は、樹木はまだ葉を落とさず、川の水量はずっと多いと思います。今回の私とは比べようもなく苦勞するだろうと想像出来ます。

私にとっては、渡渉用としてのスパイク付地下足袋は初めて購入しました、初めての長距離の渡渉（川漕ぎ）と河原のルート・ファイティングは2回目でありました。しかし、樹木の葉は全て落ち果て見通しは抜群、何かの不安を感じることはまったくありませんでした。そして何よりも遥拝所においては天気にも恵まれての月山眺望と四方の眺めが最高でした。幸運に恵まれその地点で神々と対面しつつ大きな声で奉拝出来たことはとても充足感を覚えました。

前記、神道派・仏教派二つの神仏合同独歩登拝^{とそう}抖擻業と自称し参拝して来ました。安全な歩行で念願達成となったことはとても光榮に思っています。私の大願成就です、ありがとうございました。

(end)